

## 安岡章太郎『質屋の女房』論

「外的なるもの」の支配と「逃避」のペーソス

佐藤 洋 一

(国語教室)

1 『質屋の女房』は不思議な作品である。

安岡章太郎の作品の中で、発表当時から特に安岡らしい独特の雰囲気を持つ短編の傑作・代表作の一つと語られ、評価が高かった。最近でも、『短編小説傑作選』(丸谷才一・井上ひさし編)、『文藝春秋社、平成7年7月臨時増刊』、『短編の愉楽4—近代小説の中の恋愛—』(有精堂、平成5年8月)等、昭和の優れた短編集(アンソロジー)や恋愛をモチーフとした近現代小説の短編の代表として取り上げられてきている。

しかし、その魅力や構造、位置等についての具体的考察は、いくつかの同時代批評を除いては、ほとんどみられないのが実情である。ここでは、『質屋の女房』を安岡章太郎の方法と文体の特質と構造、特に描写力(文体)の仕組みとその批評性の面から考えてみたい。

2

作者が満で40歳の時、昭和35年5月号の『文藝春秋』誌にこの作品は発表された。昭和34年から37年(作者39歳→42歳)は、日米安保条約の改定をめぐるデモ(昭和35年6月15日、50万人参加)に象徴的に表れているように、戦後15年経過と経済的な成長を背景に、アメリカとの関係を中心に政治的な「戦後」の意味が具体的に問われた最初の時期であったといえるだろう。それは「戦後文学」の意義を再検討する時期でもあった。

この時期は、作家安岡にとっても一つの転機ともなった時期である。昭和32年7月27日母、死去。そして『海辺の光景』が雑誌発表され(『群像』昭和34年11→12月号)、この作品によって翌年の芸術選奨・野間文芸賞を受賞する。またこの年は、ロックフェラー財団の招きでアメリカカネシー州ナッシュビル、ウラングビルド大学に留学することになる(昭和34年11月→翌年5月)。この間の経験は自己の感

性を軸にした独特の文明批評(紀行)として『アメリカ感情旅行』(岩波新書、昭和37年2月)に結実する。また、昭和34年には父が再婚し、このことを題材とした代表作の一つ『家族団欒図』(『新潮』昭和36年8月号)も書かれている。母の死と父の再婚、アメリカ南部から見たアメリカ合衆国、こうした生活上の転機や認識は、作品の方法や作風にも微妙な変化を与えている。

短編は、『美しい瞳』『相も変わらず』等短編集『青葉しげれる』におさめられる昭和34年代に発表された作品に続いて、『雨』(『文学界』昭和34年4月号)『質屋の女房』『革の臭い』(『群像』昭和35年10月号)『家族団欒図』『むし暑い朝』(『中央公論』同10月号)『裏庭』(『群像』同年同月)『軍歌』(『新潮』昭和37年11月号)『焼き栗とアスパラガスの街』(昭和38年2月号)が発表されている時期である。これらの8編は後に短編集『質屋の女房』(昭和38年8月号、新潮社)としてまとめられる作品群である。

3

『質屋の女房』はまず、発表当時「女の色気」がよく描けている「色っぽい小説」として取り上げられ、評価されている。山本健吉・奥野信太郎・佐藤朔の三氏による「創作合評(一九六〇・四・一九)」「群像(昭和35年5月号)」「講談社、昭和35年5月」で、山本健吉氏は「女の色気、コケットリーと、あるさびしさがよく描けている」とし、作者の自己を客観化したカリカチュアライズ(卑下)に自己批評の目を認め、同時に相手に対する観察の裏側にある「ある一種の愛情とか哀愁とかいうもの」がよく出ていと語っている。

だが、作品の「女の色気/コケットリー/あるさびしき」を作者の表現態度との関係を語ることで、作品の本質的な魅力を語ったことになるだろうか。作品発表当時の創作合評はそれ自体、時代の雰囲気や反映した証言としての意味がある。ただ、問題は「女の色気/コケットリー/あるさびしき」の構造と批評性とも言

うべき内実、つまり、〈女の色気〉と作者の自己批評の視線の意味を「僕」や「女房」「母親」等の人物、時代性等との関係から位置づける必要があるのではないか。

## 4

〈女の色気／コケットリー／あるさびしさ〉の側からではなく、戦時下の学生の青春の物語という視点から、『質屋の女房』を読んだのは浅見淵氏である。氏は学生の「青春的抒情」を前景に、戦時下の重苦しい「時代性」を後景に読もうとする。

短編集『質屋の女房』の書評のなかで、浅見氏は「スピーディな筆力と荒唐無稽な筋立てだけが重視」された当時の文壇にあって、安岡を「短編の名手の一人」として高く評価し、その文章の特色を次のように語っている（傍線は佐藤。以下同じ）。

「なんの奇もない庶民の世界」の「装われぬ真実」がえぐり出されていて、フレキシブルを失っていない柔軟な青年的感覚は、急速に変転する時代感覚をいつか消化していて、日常生活を描きながら、なお且つ時代性をも彷彿させている。その点が従来の私小説作家とちがいで、戦後派の第三新人の私小説作家といわれるゆえんである（「ユニークな人生詩—短編集『質屋の女房』—」『図書新聞』昭和38年5月11日）。

氏はまた、作品集のもつ「人生詩的な一種の诗情」についても言及している。ところで、ここでの「戦後派型の私小説作家」の意味については、

作者の家庭が敗戦を契機にして没落中産階級に顛落したこととあいまって、作者自身は自分の消極的な性癖を顧みていつそ人生の負け犬的存在であることを意識し、この観点から、作者の分身である反向日性の戦後派青年の日常生活に取材し、人情の機微や世相の芯を穿つのを得意としている（同右）と語っている。

短編集の巻頭に置かれた『質屋の女房』については、世評の高かったのはもともとで「集中の作品中いちばんサワリがあり、そのサワリが非情に終わっているので深い余韻を残している」と語り、「戦時下の無目的な暗い青春を送っている学生」の「人生の掬めぬ青春の焦燥といったものや、一見自堕落にみえる青年の清純な青春的抒情といったものが、戦時下の重苦しい空気の中に抽出されている」と述べている。

だが、前景としての「青年の焦燥や自堕落な不安と抒情—日常生活を描写—」が、後景としての「戦時下の重苦しい空気—時代性・時代感覚を彷彿—」を暗示

すると言っても、いわゆる従来の私小説的な作品の批評から一步も出てはいないのではないかと思われる。問題はそうした描写の構造と批評性の文体（方法）にこそ、安岡の独自性があるのであり、この部分を具体的に検討することによってはじめて「戦後派型の私小説作家」の新しさも語ることができるのではないか。例えば、「人生の負け犬的存在であることの意識」の構造は、作品に込められた作者の批評精神との関係から論じられなければならないし、「分身である反向日性の戦後派青年」という人物像の設定や役割についても、他者の造型の意味（質屋の女房・母親等）や、安岡における《戦前・戦中・戦後日本社会の虚構化の方法》という観点から検討する必要があるのである。

## 5

佐伯彰一氏の「安岡章太郎」（『伝記と分析の間（現代評論選書）』昭和42年12月、南北社）は、『質屋の女房』を分析的な考察も踏まえて論じたものとしては現在最もまとまったものである。

氏はこの作品を「男性的エゴイズムの懲罰の物語」「若い男性の身勝手さ、あばき立てられ、その傲慢にふさわしい罰をふりあてられる過程の物語」であると規定する。そして、その「エゴイズム摘発と懲罰のプロセス」が「さらに大きな枠組み（戦争の影）」の中に嵌め込まれている、「陰画の戦争小説」とさへ呼びたい作品であると語っている。

また、この短編における戦争の扱い方について、戦争の悪をオールマイティの免罪符にする「不潔な感傷」（創作態度）と縁のないのが『質屋の女房』であり、ここで摘発されているのはあくまでも「僕」のエゴイズムであり、男性の身勝手さであって、漠然たる戦争一般ではない」ところに『質屋の女房』の「さびしい倫理性」があるとす。そこには安岡の「負け犬的アウトサイダー」の位置をそのまま一個の眼と感受性に転化「しようとする方法があり、「一つの認識の眼」が安岡の主人公の眼を通して透視する「外界の描写、定着」にこそ作家としての成功がある、と語っている。

氏が『質屋の女房』にこだわる理由の一つは、氏自身の「戦中派的な心情」と共通なものを見る態度があると言う。この作品には「戦争中の多くの学生が、意識の上では、無理にも押さえつけ、知らぬ顔で通そうとしていた、ある心もとなない孤立感、誰に訴えようもない味気なさが、拡大された形で、定着されている」という感情である。こうした類似した立場と時代の雰囲気共有したところからの批評は、確かに『質屋の女房』の特質の側面を語っているとみることができ

しかし、この作品を「僕の」男性的エゴイズムの懲罰の物語」と語りながら、その「懲罰」の内容については判然としなない。また、「真のシテ（主役）」は「僕」ではなく「質屋の女房」「情緒的、倫理的、つまり一切の人間の優位は、完全に『女房』の側に属している」と強調するのは、(男性的エゴイズム(僕の存在)批評の物語」という論点と、何か矛盾しているようである。

氏の、こうした作品構造と効果(文体)の構造的把握の曖昧さは、この作品を「僕の」男性的エゴイズムの懲罰の物語」と線を引いた明快さと表裏の問題だが、「僕」の視線に浮かび上がる他の人物への考察の欠如、詩的な文体の構造への視点の不十分さ等、安岡作品の(多面的)多層的構造への理解の不十分さにあらわれている。例えば、作品結末の場面、「女房」の(明るい笑い)の意味は何か、「ただ一言もなく」「無意味」に(外套)の襟のあたりを撫で廻す他ない「僕」の行為の意味や(外套)の象徴性、作品における批評性はどのように考えるべきか、等の課題である。

表1 『質屋の女房』における人物像の位置と役割—安岡章太郎の人物造型—

内部と外部	戦前・戦時下・戦後日本社会の「虚構」化	
	「内部」の探究と虚構化	「外部」の探究と虚構化
人物像の意味と役割	①中心人物 (視点人物)	③時代・社会の 典型的人物
作品	②鏡像としての人物・動物 (空想)の方法	④時代・社会の 多数や一般性
備考	③批評の対象	④作品の思想
		⑤時代背景

6  
この作品を「僕の」男性的エゴイズムの懲罰の物語」と語りながら、「真のシテ（主役）」は「僕」ではなく「質屋の女房」(佐伯氏)とするような混乱が生まれる原因の一つは、安岡の人物造型の意味を「虚構化」の観点から構造的に位置づける視点が欠けているためと考えられる。

「僕」や質屋の女房・母親・友人F等の人物は、他の安岡の作品がそうであるように一見バラバラにみえる。しかし、単に私小説的な設定を越えて、安岡的「虚構化」の方法の中で構造的に位置づけられていると読むことができるのではないかと考えている。「外部」としての社会や制度(国家)と人物の「内部」との関係の「虚構化」という観点から(戦前・戦時下・戦後日本社会の虚構化)、「質屋の女房」における人物造型の特徴、それぞれの位置と役割等について考えてみた。要点をまとめたものが次の表である(表1、参照)。

質屋の女房  
(「文藝春秋」昭和35年5月号)

備考  
(1)問題の個人  
(2)曖昧な存在感覚  
(3)視点人物(記録者、兼中心人物)

安岡の主人公  
(1)問題の個人  
(2)曖昧な存在感覚  
(3)視点人物(記録者、兼中心人物)

・大学生  
・墮落する熱意や根気もない人物  
←  
・自分の歪んだ内部(無意識)との出会い

質屋の女房  
・元商売女で今は質屋の女房(はじめ)  
←  
・時代と運命に支配されながらも明るく生きる一人の「女」(末尾)  
・(外套)のイメージ変化

(1)中心人物の内面でイメージが変化する鏡像、分身的な人物や動物  
(2)独特の心理描写の方法(空想(錯誤))の方法  
(3)中心人物の「対象化」

(1)時代の価値観や秩序の典型(職業・地位・経歴・組織等)を表す人物  
(2)国家・権力・時代の側から照射する

(1)時代の常識的価値観と一般性を表す人物  
(2)中心人物の孤立や歪み等を強調する役割

(1)作品の構造によって「批評」される意味  
(2)作品の構造的特色と「批評性」の関係  
(3)人間像と文体、時代の雰囲気等の関係

(1)作品の構造的特色から読むことのできる「思想」や「主題」  
(2)多面的多層的な解釈  
(3)国家と個人の枠組み、小説の方法との関係等

僕  
・大学生  
・墮落する熱意や根気もない人物  
←  
・自分の歪んだ内部(無意識)との出会い

質屋の女房  
・元商売女で今は質屋の女房(はじめ)  
←  
・時代と運命に支配されながらも明るく生きる一人の「女」(末尾)  
・(外套)のイメージ変化

(1)中心人物の内面でイメージが変化する鏡像、分身的な人物や動物  
(2)独特の心理描写の方法(空想(錯誤))の方法  
(3)中心人物の「対象化」

(1)時代の価値観や秩序の典型(職業・地位・経歴・組織等)を表す人物  
(2)国家・権力・時代の側から照射する

(1)時代の常識的価値観と一般性を表す人物  
(2)中心人物の孤立や歪み等を強調する役割

(1)作品の構造的特色から読むことのできる「思想」や「主題」  
(2)多面的多層的な解釈  
(3)国家と個人の枠組み、小説の方法との関係等

1、墮落する熱意や根気もない僕の無目的な生き方、存在感覚  
2、外部の暴力的な圧迫感、その漠然とした情緒・時代感情  
3、戦時下の、外部的なものの情緒と雰囲気

1、時代と運命の中の「一人の女」の発見・恋愛(女房とのある共有)  
2、僕の自己発見(無意識の意識化の過程)  
3、戦時下の、外部的なもの、の情緒と雰囲気

・戦時下の日本

「僕」は戦時下、「何ともイラ立たしい幻影」「反復」の幻影に全身をつつまれている人物である。母親の心配をよそに大学へも行かず、友達の下宿で「妙なものを」書きつづり「旅行」と称して吉原や玉の井に泊まってくる……。学校は怠けるが、「墮落」する熱意と根気さえ無い「僕」は、「マメに勤勉に『墮落の道』を歩き続ける根気を持つ」友人Fからも見棄てられている状況である。

「僕」は作品の中心人物(①)であり、視点人物(「語り」の視点)を兼ねている。作品の内実は「僕」の視点から、心理描写の過程として語られる。「僕」の心理描写の中で最も重要な点は、ある人物やイメージについての認識(思い込み、錯誤、空想等)が変化し、その変化の過程に「僕」の内部が描かれるということである。それは「無意識」の「意識化」の過程であり、曖昧で漠然とした自己の存在感覚の深層(本質や無意識)に出会うアイロニカルな「自己発見」の構造を持っている。

ある人物やイメージとは、「鏡像(分身)的人物・イメージ(②)」とでも名づけることができる。「質屋の女房」では質屋の女房の「僕」の内面でのイメージの変化が語られる。そしてこうした二重の変化過程の描写に、『時代』の圧迫感や戦時下の雰囲気、見えない運命に支配される微妙な心理……等が浮かび上がる構造なのである。質屋の女房は「質屋の主人の妾(元商売女)」という立場の女から、「僕」とある共通のものを一時にせよ共有した関係となり、最後は「時代や運命に支配されながらも明るく生きる一人の女性」としての存在に変化する。こうした「鏡像的人物」のイメージの変化は、質屋の女房の存在感を鮮明に描くとともに、「僕」の歪んだ内面(深層)を照射することにもなっている。

「質屋の女房」は質屋の主人の妾という女性であることは述べた。彼女は、「牛か熊(ひぐま)のような」五十がらみの「おとうさん(主人)」に店を任せられているようだが、自由な外出等は許されない境遇である。主人は他にも店(「愛人」を持つ)を持っているらしく日を決めて廻ってくるらしい。彼女の洒落た態度と色気は着物の趣味や粋な着こなし、「笑い」や会話に効果的に描かれている。例えば、「僕」の眼に映るこの女性は、「黒っぽい着物の裾から、白いピツタリした足袋」が覗き、「年齢にくらべて(三十歳くらい)おそろしく地味な、おふくろの着ているものより、もっと地味な着物」を着ている。「お寺のように陰気」な「死んだように重苦しい空気/黴の臭い」がする店では、彼女の「笑い・含み笑い」で「そのまわりだけが灯がともったように(景色や雰囲気)生きかえ」るのである(以下、作品の引用は岩波書店版『安岡章太郎集3』による)。

確かに「女の色気、コケットリー、おかしさ」はいきいきと描かれている。し

かし、この女性の「色気やコケットリー」は、「僕」への好意の表現としての色気や女性の魅力としての色気の表現だけではなく、商売女だったという過去/外出もままならぬ妾としての現在の境遇(主人による支配)そして戦時下という時代と運命に支配(圧迫)されている存在の、漠然とした気分や情緒的な表現でもある、ということが重要なのである。

同様に、この女性の魅力的なコケットリーの「おかしさ(哀愁)」は、そうした支配や圧迫の中で生きる一人の女性の健気さと表裏一体の構造になっているように描かれている。「女の色気、コケットリー、おかしさ」が、女性の人物像を語るとともに男性(僕)の欲望と無意識を拡大し、さらに時代感情や雰囲気暗示するといった多義的な構造を持つ描写力と文体、ここに安岡独特の方法の一端があると見えるだろう。

安岡の作品では、「③時代の秩序や価値観を典型的に表す人物」が設定され、国家・権力・組織等の側から中心人物の存在感を拡大したり鮮明に照射することが多い。例えば、『ガラスの靴』では進駐軍の「グレイゴー中佐夫妻(米軍軍医)」が悦子との夢の時間を相対化する役割であり、『ジングルベル』での「親父」は元軍人で公職追放(現在は無職)の立場であり、中心人物の日常や恋愛を圧迫する重要な枠組みになっている。「家族団欒図」では「父の再婚」をめぐる、主人公が鏡像としての父(自己の分身)に出会う物語である。これは「父」の存在(戦争(戦後)の責任)戦後の自己存在、に正面から出会うという構図である。

「質屋の女房」ではこの③型の人物は具体的には登場せず、時代背景(後景)として描かれている。それは世の中の「奇妙な混乱」を語る場面である。「ある日、映画館に入ると、バドリオ政権ができてから禁止されているはずの『ファシストの歌』をやっているの、おやっと思ひ、出てみると町ではイタリヤ降伏と、ムツソリーニの復権をつたえる号外売りが走っていたりした。(略)払底した陸海軍の下級将校を、速成でおぎなひをつけるために、大量の学生が動員されはじめた。」なお、出征した学生をはじめ、「僕」の友人Fや母親や質屋の主人等はそれぞれの状況や、出征していく学生の様子等が暗示されているわけである。特に、質屋の倉庫で、全集ばかり一冊の欠巻もなく質屋に入れ出征していった学生を「一種の親しさ」をもって想像する場面は、「何ともイラ立たしい幻影」「反復」幻影に支配された自分の境遇と重ねられ、人生の目的を見出せないやり場の無い焦燥や倦怠感等時代の「情緒的な気分」が効果的に語られている。

7

「僕」と質屋の女房の「関係」は、いわゆる中途半端な墮落学生と商売女あがりの妾という関係ではあるが、二人の関係を支えているのは「僕」の側からみると、彼女の中に自分と《ある共通なもの》を無意識のうちに、と言いか恋愛感情と質屋に好かれたという奇妙な欲望の曖昧さの中に発見することである。ここは、作品の展開上からも大切な部分であり、かつ安岡的な描写力が生かされている。そしてそれは、質屋の女房への関心が「恋愛ではない」が「金を借りる側」ととって「相手に好かれたという気持ち」が恋愛によく似た心の動きを示すことになる、と語っている場面によく表れている。

A  
まるで僕はその質屋の女房に恋愛していたように思われるかもしれない。しかし、そんなものではないのだ。と云って、それでは恋愛とはどんなものかと訊かれても困るが、とにかくそのころの僕は、ただ何となく彼女の店を利用していたにすぎない。しかし、こういうことは云えるだろう。金を借りる側にとつては、いかなる場合でも相手に信用を博そうとか、そのためには相手に好かれたいかいという気持ちか絶えず働いており、それは恋愛によく似た心のうごきを示すことになる、と……僕自身でも、何度も通ううちに、はつとするようなことがないわけではなかった。夏休みもそろそろ終わりがけたころ、学生服を受け出しに行くと、青い顔で番台に頬杖をついていた彼女が、／＼「あんた、恋愛でもしてんの？」と、狎れ狎れしい口調で聞いた。(略)ふと見ると、彼女は青い顔に汗をにじみ出さしていた。それは、いつになく醜い感じだった。首筋に覗いてみえる真っ白い半襟まで汗臭いように見えた。しかも彼女はその前屈みの姿勢の中に、かつてないほど強烈な「女」を全身で発散させていた。

B  
A場面は、質屋の女房への関心と旦那がいる大人の女性への警戒心の間で揺れている心情が語られている。と同時に、女性への関心と欲望(恋愛)が「質屋」に入られるための心情と類似しているという屈折した心理が大変ユーモラスである。ただ、「僕」の彼女への関心は、いわゆる甘美でロマンチックな「恋愛感情」というイメージではないようである。既成の「恋愛」という感情ではなく、曖昧さと、しかし《ある切実なもの共有》であると読むことができる。

B場面は、主人(旦那)の愛人問題に悩む一人の「女」としての苦悩と孤独が、「僕」の眼から語られている。彼女は、青い顔に汗をにじみ出させた／＼醜い感じ／首筋の真っ白い半襟まで汗臭い……、そして強烈な「女」を全身で発散している。ここは、質屋の女房の「女」に反応している男性としての欲望もややエロチック

に語られているわけだが、より重要なのはこうした苦悩と孤独の交錯の場面の深層に、「外的なもの」に支配(圧迫)されている人間の苦悩の共通したものが無意識のうちに暗示されていることである。

つまり、質屋に行つて、品物で無く自分が「あんた、恋愛でもしてんの?」「童貞じゃないわね」等と値踏みされるような逆転したユーモアと、一人の「女」の全身的な苦悩と孤独、それに耐えている姿、これらの場面の奥には「僕」と質屋の女房の《ある共通なもの》が語られていると読むことができるのである。

なお、両者の「関係」を《支配・被支配》の構図からまとめたものが、次の表である(表2)。

表2 『質屋の女房』におけるイメージの構造―《支配・被支配》の構図―

人物	《支配される存在(被支配者・存在)》	《支配するもの(支配者・存在)》
僕	(1) 大学生・学生動員(召集) 直前の人物 (2) 無目的で自墮落な生活を送る人物 (3) 吉原や玉の井等の遊廓通い (墮落の熱意や根気も無い)	(1) 「戦争」「国家」による支配(召集) (2) 「逃避」的心情による自己支配 (3) 内的な不安・欲望による支配
質屋の女房	(3) 外にも自由に出られない囲われ者の境遇 (4) 町会の婦人パジャをつけた和服コート姿	(1) 娼婦という「過去」による支配 (2) 「旦那」による支配 (一人の女性としての孤独／妾としての立場) (3) 「戦争」「国家」による支配

8

質屋の女房の女性像を効果的に、シンボリックに表しているのは、《笑い》と会話である。「僕」の視線が「語り」の文体としてそのまま表現構造となっているこの作品にとつて、「僕」の眼にとらえられる女房の多義的な《笑い》は女房の謎めいた魅力と色気を通して読者に女性像を語るとともに、「僕」の困惑や欲望等女房に惹きつけられる心理的過程をも巧みに描いている。

質屋の女房の多義的《笑い》は、時代と運命・境遇に支配される女房の内面と「僕」への心理的距離感を象徴的に暗示している。それらを整理するとおおよそ次の五つにまとめることができようである。

(1) 「僕」への好意の表現、媚としての《笑い》

(2) 立場を暗示する〈笑い〉／優位に立っていることの自覚。含み笑い。  
 (3) 相手を安心させる〈笑い〉。自分の〈笑い〉の効果(華やぐ)を知っていて男を安心させる。過去の職業経験が背景にある。

(4) 笑わなければいけない状況(開き直りの強さ／批評としての〈笑い〉)  
 (5) 同じもの(虚しさやつらさ等)を共有しているとのサインとしての〈笑い〉。元

商売女で妻の立場、覚悟して生きていこうという決意等が背景にある。

この中で最も重要なものは(5)共有するものの〈笑い〉であろう。この作品を戦時下の青年の衝動的でエゴイステックな「恋愛」(や妻の火遊び)に終わらせず、「一見自堕落な青年の清純な青春の抒情」「一種の詩情」(浅見氏)を湛えさせているのは、両者の人物の中に、ある一生懸命なものというか健気なものを感じられるからである。無論世間的な意味では、ともに両者は無垢ではあり得ない。しかし、〈茫然とした情緒的な時代の圧迫感・支配〉に耐える共通な心性によって結ばれている。こうしたものがバネになって二人の内面が拡大され、時代感情が暗示されているのである。

## 9

〈外套〉(返された冬物のコート)は、女房の反復される〈笑い〉とともに作品の中で独特な意味をもっている。〈外套〉は女房との「関係」を象徴的に語るイメージであり、彼女の〈笑い〉は女性の人間像の特色と関係性を語っている。ここでは〈外套〉のもつ象徴的な意味を中心に、末尾の場面の効果について考えてみたい。

初めて、その質屋に行った時、主人は大きなこの冬物の〈外套〉に五拾円の値をつけるが、「襟の先が一部分、切れかかっている」のを見咎められ、半値となる。結果的に悪い値段では無かったものの、「僕」は「自分の人格が半値に切り下げられた」ような気になる。

この〈外套〉は「僕」の入営前日の夕方、彼女によって「風邪をひかないように」とわざわざ返される。作品末尾の場面である。

突然の訪問に喉がつまりそうだった「僕」は、「町会の婦人部のバッジ」をつけている彼女を「なぜか憐れ」と感じる。

C 「お忘れになったのかと思って……」／僕は胸の中が真っ黒くなるような気がした。決して忘れたわけではないにしても、彼女のことを思いやること

がまったくなかったのは、たしかだった。／

……しかし、僕が恥じらいのあまりほとんど恐怖に近い心持を味わうのは、

D まだこれからだ。／「これを……」／と、彼女が微笑をふくむようにして差し出したのは、四角く畳んだポツテリとした手ざわりでやつと憶い出した僕の外套なのだ。／途中で風邪をひかないように……。それから、これは失礼かもしれませんが、あの方はあたしからのお饞別にさせて。／彼女は明るい笑いをうかべながら、それだけ云うと、さつと暗闇の中に姿を消した。

E 「僕はただ一言もなく、しばらくの間は無意味に指の腹で、外套のすこし擦り切れた襟のあたりを撫でていた。

二人の恋愛関係は、自分で自由に生きようとしても生きられない境遇の女と、突然召集令状が来て戦場へ行かなければならないような状況の青年の孤独が折り重なったところに生まれている。いわば現実の裏側(影・暗闇)の部分で、一時的にせよ(あることを共有し合う)という関係であった。それは「僕」の中途半端に墮落した生活にせよ、質屋の女房の過去や現在の境遇・暗い倉庫での出来事等の「暗闇」のメタフォアとしてもそうであった。

C・E場面で「町会の婦人部のバッジ」という公的な「表」の世界に、「僕」はうさくささと彼女の本質との違和感を「なぜか憐れだった」と感じる。そして彼女はやはり「さつと暗闇の中に姿を」消すのである。「あの方はあたしからのお饞別にさせて」(D場面)という言葉には、一時的な二人の「共有」の意味を公表の世界)で再確認するということと、それに対する彼女の惜別が込められている。無論、元商売女としての立場から代金は「饞別」という、大人の優位に立った茶目っ気も利いている。このように考えると、〈明るい笑い〉は、時代や運命に支配される一人の女としての誇り(自尊心)や「僕」への最後の挨拶、そして自分への激励であったかもしれない。

また、返された〈外套〉には次のような意味が考えられるだろう。(1)文字通り、途中で風邪を引かないようにという女性の思いやりの意味。(2)一時的にせよ好きだった相手の品物を返すことで(外套は出会いの品物)、自分の気持ちに区切りをつける。女の側からの別れの挨拶の意味。(3)「お忘れになったのかと思って」という言葉とつながり、一度だけで忘れられる辛さの裏返しであり、女性の自尊心の表現(特に、商売女上がりの妻と軽視される屈辱から自由になるため)。

さて、それではこうした彼女の言葉と行動によって拡大される「僕」の内面はどのようなものか。「ほとんど恐怖に近い」「僕」の気持ちと、「無意味に指の腹で、外套のすこし擦り切れた襟のあたり」を撫でる行動の意味について簡単に考えてみたい。一言で言うと、この「恐怖に近い」感情とは彼女の深い態度と優しい思

いやりによって、逆に「自己の醜悪な本質」と出会わせられてしまった恐怖である。彼女の潔さとは、一つは二人の《共有》の意味を大切にしていたという精神性（純粹さや誇り）、もう一つは自分を圧迫支配する「外的なもの」に対する態度とすることができらるだろう。

これらは何れも「僕」に決定的に欠落していたものであり、厳しい批評として「僕」を貫く。「勤勉に『墮落の道』を歩き続ける根気」も無かった「僕」は、これまで学校・母親や自己から逃避してきた。しかし、彼女との二人の《共有》の意味さえ自覚できず、結果として質屋の女房からも逃避し続けてきた人物であった事実が白日のもとに晒されたのである。《外套》の擦り切れた襟のあたりは、質に入れた時、半値に切り下げられた原因の部分である。つまり、一見、見掛けだけ良くて実は目立たないところが擦り切れていて半値の値打ちしかない……、「僕」の歪んだ自己、敗北感の象徴としての意味がある。そして、「ただ一言もなく」「無意味に」撫でる行為は、こうした敗北感と茫然と向き合っている場面とすることができらるだろう。

## 10

安岡作品の多くは、自己の存在感覚の曖昧な人物が設定され、ある事件を経過して自己の存在の深層と向き合いはじめるといって構造を持っている。それは、結末が強調された読み方になると中心人物（少年や青年が多い）の「自己発見」の物語（アイロニカルな教養小説的作品。青春小説・恋愛小説の形。）となり、中心人物の「劣等生」「落第生」的人物像の特徴が拡大されると空想的で逃避的な主人公による精神的彷徨の小説と読まれることが多い（自己卑小化による「社会・時代」の批評的作品）。

しかし、安岡文学の場合重要なのは、中心人物の「語り」の視線はその人物の曖昧な存在感覚（内部）の認識の過程を表す文体であり、同時にそつした「語り」（心理描写）は無意識から意識化への自覚の過程であるということである。心理描写の方法は感覚や記憶・錯誤（思い違い）、鏡像的人物の設定と変化等独特の表現によって、個性的な文体を形成している。作品を読むことは、日常的な事実や記憶の断片を通して、表層から深層への構造的な認識過程を読むことになる。作品の多面性多層性はこの描写の多義性の魅力によるのである。

安岡作品を抽象化する負しさを承知で言えば、『質屋の女房』は、「外的なるもの」の支配（圧迫）と「僕」の「逃避」のペーソス（悲哀）を描いた作品、とすることができらるだろう。無論、《女の色気》の描写や《安岡的主人公の精神的彷徨

に焦点化して読むことも可能であるし、こうした視点の意義を軽視しているわけではない。多義的多層的な描写の構造はまた、読者の光の当て方によって多面的な角度やテーマを示す面（解釈の多様性）をもっているからである。

しかし、安岡独特の方法と文体の解明という点からみると、「茫然とした、情緒的ともいえる」時代の狂気や霧囲気、その圧迫感（支配）を一筆書きのように浮かび上がらせる描写力にこそ、この作品の特質があるのではないかと考えられる。質屋の女房の色気や「僕」の無目的な生活、全編に漂う詩的なペーソスやユーモアの文体は、こうした時代の感情の霧囲気の表現との関係からとらえる必要があるのである。

安岡の短編は、時代の霧囲気を暗示する奇妙な、しかし詩情を湛えた「恋愛」小説の様相をもつものが多い。例えば、短編の『ガラスの靴』『ジングルベル』等、初期から「恋愛」をモチーフとした作品の系列がある。無目的な生活を送る青年（僕・私）にとつての「恋愛」の対象は少女や若い女性であることが多いが、「恋愛」の意味はさまざまである。ただ、そこには女性像の描写を通して、「僕（私）」の曖昧で歪んだ存在感覚の深層が逆照射されること、語られる「恋愛」とその関係の深層に《時代感情や霧囲気、情緒》が浮かび上がる構造をもっていることが多い。と同時に、ある種のリリズム（抒情性、詩情）もいくつかの変奏をみせながら一貫した特色であるということができらる。

## 11

国家や戦争といった大状況だけではない様々な「外的なるもの」の支配力が、本人の意思や努力に関わらず人間の運命を変えていく。こうしたモチーフは「首斬り話」「悪い仲間」以来、「遁走」「流離譚」まで一貫してみられる安岡作品の特徴の一つである。安岡自身、精神形成期と重なった戦争中のみならず、戦後も「外部からの力で押さえ込まれている」という「圧迫感」、それは「軍部とか、警察とか、占領軍とか、個人に対する組織の力とかいったものではない。もっと茫然とした、むしろ情緒的ともいえるもの」に、眼に見えないところで押さえ続けられていたと語っている。

ただ、こうした作品のもつ枠組みや、前景（人物像や関係）と後景（時代性）との表現の二重性、といった指摘自体は一般的なものであり、作品の題材や構図をなぞるだけにとどまりがちである。安岡的な文体と方法の特質、固有性がどこにあるかの検討が重要である。本稿は、そのポイントを安岡の描写力の構造の特質、その多面性と批評性にあるという立場から『質屋の女房』について考察した

ものである。

〔注記〕

- 1、拙稿「『ガラスの靴』論（上）（下）」『愛知教育大学研究報告第41輯・42輯（人文学）』（愛知教育大学、平成4～5年）。「シングルベル」論『国語国文学報第51集』（愛知教育大学国語国文学研究室、平成5年）参照。
  - 2・3、安岡章太郎「後書」『安岡章太郎集3』（岩波書店、昭和61年9月）。
- （平成7年9月11日受理）